Japanese Association of Educational Psychology

育問題研究会」を組織されたことは，理論と実践の統一という点から考えれば納得がいくのである。

先生にとっては問題を解決するためには実行が必要であり，理論的に基礎づけられるのを待っていたのでは事は進まないのであって，実行するうちに真に解決を必要とする問題が発見されてくるので，それを確かな方法で解決していくのが学問ということになるのである。

また先生は子供のことについて心配しているからこそ子供のことを問題として研究をしようとする姿勢ができるのであり，子供をたんなる存在として，それをいわゆる科学的方法で明らかにしようという態度では子供の問題は解決できないということを主張しておられた。戦後間もなく国立教育研修所長になられた先生が所内の一室を所員の子供達のための保育室とされたり，1926年に北大構内に古電車の保育室として有名だったモグリの幼児園を開設し，近隣の子供達を集め，母親達を組織したのも幼い子供達への愛情もさることながら，そうした保育の場がなくては子供の研究などできないといった強い信念からであったのである。この２つの施設が後にそれぞれ「白金幼稚園」，「北海道大学教育学部付属乳幼児発達臨床センター」として発展したのも先生の類まれなる信念によるところが大きいであろう。

つぎに先生は解決を必要とする問題を投げかけている教育の事実は複雑なのでそれを研究するには心理学単独では十分ではなく，社会学・人類学・生理学・小児医学・精神医学等の学問の方法をインテグレートする必要を強調された。心理学は教育や発達の研究にとって重要な学問ではあるが，他の関連科学とのインテグレーションの方法において価値が認められるというように考えておられたのであろう。よく先生は教育心理学や児童心理学の研究にはピントのはずれたものが多いということをおっしゃっておられたがそれは教育や発達という事実の複雑さを認識していないかのようにさえ見える恰好だけつけた研究に対してのやりきれなさを感じておられたからであろう。

先生を児童発達の研究者と狭く限定するのは必ずしも適当ではないかもしれないが，私達今日の児童発達の研究者がしばしば新しい問題として論議するようなことにとっくに気づいておられたのである。

参考文献　城戸幡太郎（1980）幼児教育への道　フレーベル館
城戸幡太郎（1968）心理学問題史　国土社
城戸幡太郎（1958）心理学と教育　国土社

「わが国児童発達研究の先達たち
――その業績の今日的意義――」

内田　伸子

◆多くの研究者は，「大学で教え込まれたやり方をひたすら踏襲して，同工異曲の研究を積み重ね，専門誌を広大な砂漠へと化していく」（須賀；1989）。その一方で，ひとにぎりの独創性を兼ね備えた人々が，広大な砂漠に点在するオアシスのように，次の世代に伝承され，さらに次の世代へと伝えられる仕事を成し遂げる。三人の先達はそのような際だった成功を収めた，日本の発達心理学界の数少ない巨人であるとの印象を受けた。このように時代を越えて受け継がれる業績は，単に時流に乗るということでは決してないということを確認した思いである。

◆確かに，三人の先達は，それぞれ個性的な学風を持っておられる。しかし，提案者のお話を伺い，三人に共通する点があることに気づいた。

第１に，関心の網の目の広さと視野の広さに舌を巻く。子ども・人間のなんたるかを理解するには，まるごと捉えなくてはならないという姿勢が一貫して読み取れる点である。

①園原先生＝機能的連関の強調。
②波多野先生＝発達と教育の関係についての深い洞察。
③城戸先生＝理論と実践の融合。

第２に，第１のことと関連して出てくることであるが，実践を大事にされたという点，すなわち，理論と実践，発達理論と教育とを融合させようとされたという点である。

城戸先生が科学的方法だけでは子どもはわからないとして幼稚園を作るという姿勢に典型的に現れているように，発達過程を知るということは，いかに発達するかだけでなく，具体的に発達過程に働きかける「発達せしめる心」というか「教育」のプロセスを理論体系に取り入れようとした。さらに，実践に多く関わりを持ち，大いに発言することで，理論を適用したり検証しようとした。このように，実践と理論の相互作用，両者の有機的な統合が見られる。それが本物だった故に，実践家，教師などに多くの支持を得たのだと思う。

第三に；問題関心が時代を越えて多くの心理学徒の関心に共通しており，いずれも，時代を越えて普遍的な問題を真っ向から取り上げてこられたという点を指摘できる。

園原先生の機能諸関連についての問題意識は，ヴィゴツキーが，知性と情動とが関係づけられていない点を嘆き，「われわれの意識の知的側面と情動的意志的側面と

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

の分裂は，伝統的心理学の基本的問題の1つとなっている」(『思考と言語』上，p.28) と指摘して以来，今日においてもなお，乗り越えられていない大問題に通じるものである。

波多野先生が昭和30年に書かれた，視聴覚的方法の心理学的基礎について論じた論文では，当時の認識論にはプロセスの考え方，感性的認識から理性的認識にいたる道筋についての理論が欠けていると欠陥を指摘し，その欠陥の由来について考察している。それを踏まえて，マルクス主義心理学やワロン，ピアジェ理論に基づいて，感性的認識から理性的認識にいたる認識の＜プロセス＞についてのモデルを提出している。この論考は，まさに，現代の認知科学の問題意識そのものである。

城戸先生が適時の教育的働きかけの必要性に気づき，幼児教育臨床施設を作られたのは，教授介入により発達の過程を明らかにする思想と軌を一にするものである。

第4に，3人とも，研究者個人の関心を追求するに留まらず，研究者のまわりの人々へのサーヴィスを厭わない。多くの弟子を育て，外国の業績を知らせ，研究者だけでなく，実践家に対しても大きな影響を与えることになったという点である。

以上概括した点は，この先達たちが，わが国の心理学史に大きな足跡を残したゆえんだし，今日においてもなお大きな影響を与え続けている理由であろう。時代をこえてもなお，生きながら，命を持ち続ける業績とはどういうものかを学んだ思いである。

また，その業績や理論から，現代日本の発達研究者が事はこれらの先達の業績の影響を陰に陽に非常に多くを受け継いでいるということを実感した。このシンポジウムで先達の業績を振り返ることにより，何が発展し，何が少しも変わっていないのかを確認できたように思う。

◆現代の日本の心理学界では，ともすれば，新しい学説を追いかける風潮，横文字で著わされた業績にばかり目を向ける風潮がなきにしもあらずであるが，日本のオリジナリティーの高い業績に学ぶ姿勢を持ちたいと痛感させられた。

また，提案者の先生がたが，これらの先達をどうやって乗り越え，あるいは受け継いで来られたのかを，ある程度知ることができたことも，意義があった。

◆今後，こうした先達たちの業績を反省することをきっかけにして，発達研究に携わるものとして，これらの優れた業績ならびに研究者としての生き方の＜今日的意義は何か＞を考え，発達研究の発展を模索する礎にしたいと願っている。

「わが国児童発達研究の先達たち ——その業績の今日的意義——」に参加して

山田　洋子

本シンポジウムの主旨は，3人の先達が残された業績の今日的意義を見直すことである。これは今後の発達研究を考えるために，きわめてタイムリーな企画だと思う。

なぜなら私を含めて日本の心理学者は，「新しがり病」と「舶来コンプレックス」の持病をもっていることが多く，欧米の（現在では圧倒的にアメリカに偏っている）心理学の新しい動向変化には過敏なほどに詳しいのに，日本の研究を自分たちの目できちんと評価しない傾向があるからである。国際的に通用する真に独創的な研究を生みだすには，自国の文化的伝統を無視するのではなく，過去の研究を歴史的に位置づけるパースペクティヴをもち，何がどこまで明らかにされたのか，何をどのように受け継ぐべきなのかを自覚する態度が必要だろう。

3人の先生のお仕事は偉大すぎるので，まったく個人的な感想を述べることしかできないが，それぞれの先生方の関心領域がきわめて広く，全体的・統合的に人間の心理現象をとらえようと努力されたことに特に深い感銘を受けた。

全体的・統合的という1つの意味は，「子どもをよく育てたい」という実践的・教育的関心と，「子どもはいかなるものか」を知りたいという学問的関心，必ずしも両立しないふたつの問いかけをあくまで統合しながら両方問いつづけられた，教育者としても学者としても誠実な態度である。

2つめの意味は，心理現象を，知覚，思考，運動の発達などというように，個々ばらばらにみるのではなく，相互に機能連関した全体的な対象としてとらえようとされた問題把握のしかたの統合性である。

3つめの意味は，人間の生の姿を知るために，いわゆる自然科学的な方法だけでよいのか，子どもを相手にして厳密な実験が可能なのか，子どもの個性をどのようにして把握したらよいのか，他の諸科学との integration が必要ではないかというような方法論としての統合性の問題に正面から立ち向かわれたことである。

これらの問題は，古くて新しいものだということを改めて認識した。研究というものは直接的に「進歩」するわけではなさそうである。先生方のお仕事を新たに現在の目で見直すならば，検証実験や統計的処理にのりにくく，置き忘れられたような部分にこそ，豊かな宝庫が発見できるだろう。私たちの世代は，ぜひともその遺産や財産を贈与税なしで勝手に譲り受けて，発展的に継承したいものである。

NII-Electronic Library Service